

Conformal metrics

東工大理

吹田信之

1. まえがき. Sario - Oikawa はその著書 "Capacity functions" においてこの問題を提起した; $C_\beta(z)$ を開リーマン面 Ω の境界の容量, $K(z, \bar{z})$ を Ω の Bergman 核とするとき, $C_\beta^2(z)$ と $\pi K(z, \bar{z})$ の大小を比較せよ [5].

この問題はのちに示す C_β と K との関係式

$$K(z, \bar{z}) = \frac{1}{\pi} \frac{\partial^2}{\partial z \partial \bar{z}} \log C_\beta(z)$$

により, 計量 $ds_\beta = C_\beta |dz|$ の曲率

$$K(ds_\beta) = -\Delta \log C_\beta(z) / C_\beta^2(z)$$

の許西の問題に帰着せられる. 著者は二重連結領域について $C_\beta^2(z) \leq \pi K(z, \bar{z})$ を示し, 一般領域についても同様の不等式を予想した [6]. この予想は上のことから, $K(ds_\beta) \leq -4$ と同値である. 支持計量を利用する一とにより, Ω が n 個 ($n > 2$) の曲線によりかまされた領域ならば $K(ds_\beta) < -4$ をみたす点 $z \in \Omega$ は存在する.

他の等角計量についても同様の予想がある。 $C_B(z)$ を解析容量とし、 $ds_B = C_B(z)|dz|$ とするとき $k(ds_B) \leq -4$ の予想は等号条件を除いて著者により解かれた [7, 8] である。さらに、リーマン面 Ω 上で正則かつ Dirichlet 積分

$$\iint_{\Omega} |f'(z)|^2 dx dy$$

が π で押えられる函数族 \mathcal{D} について

$$C_D(z) = \sup_{f \in \mathcal{D}} |f'(z)|$$

とおく。酒井氏の結果 [4] を使えば、 $ds_D = C_D(z)|dz|$ について、 $C_D(z) > 0$ ならば $k(ds_D) \leq -2$ が示される。この場合も予想は $k(ds_D) \leq -4$ であり、三重連結の場合には正しい [1]。酒井氏は最近この予想に肯定的な解答を得たとのことである。

Ω を平面領域とし、 \mathcal{D} の部分族で単葉な函数族を \mathcal{S}_D とかく。

$$C_{SD}(z) = \sup_{f \in \mathcal{S}_D} |f'(z)|,$$

$ds_{SD} = C_{SD}(z)|dz|$ とおけば、 $C_{SD}(z) > 0$ かつ微分可能な場合に $k(ds_{SD}) \leq -4$ が示される [7]。

リーマン面 Ω 上の Bergman 核は計量 $ds_k = \sqrt{\pi K(z, \bar{z})}|dz|$ の k 倍

をみるべく、 $d\sigma_K$ の曲率に $\frac{1}{4}$ 以上、 -4 より大きい負も小さい負も存在することを円環の場合で示す。

2. 基本等式 容量 C_β と K との関係式 (1) は [6] で証明された。ここではより簡単な別証を示す。

定理 1. Ω が O_K に属するリーマン面ならば

$$(1) \quad K(z, \bar{z}) = \frac{1}{\pi} \frac{\partial^2}{\partial z \partial \bar{z}} \log C_\beta(z)$$

証明

$$H(z, \zeta) = g(z, \zeta) + \log |z - \zeta|$$

とおく。ここで $g(z, \zeta)$ は Ω のグリーン関数、局所変数 z, ζ を Ω の表示に用いた。対称性から $H(z, \zeta) = H(\zeta, z)$

さらに

$$H(z, z) = \log \frac{1}{C_\beta(z)}$$

$H(w, \omega)$ は対称な調和関数なので $w = z, \omega = \zeta$ のまわりでフーリエのように展開される

$$H(w, \omega) = a_{00} + \dots + a_{20} (w - z)^2$$

$$+ a_{\bar{2}0} (\overline{w - z})^2 + a_{02} (\omega - \zeta)^2 + a_{0\bar{2}} (\overline{\omega - \zeta})^2$$

$$+ a_{11}(\omega-z)(\omega-\bar{z}) + a_{\bar{1}\bar{1}}(\omega-z)(\omega-\bar{z})$$

$$+ a_{1\bar{1}}(\omega-z)(\omega-\bar{z}) + a_{\bar{1}1}(\omega-z)(\omega-\bar{z}) + \dots$$

== τ a_{00} は実数であり, $a_{j\bar{k}} = \overline{a_{\bar{j}k}}$, $a_{\bar{j}k} = \overline{a_{jk}}$, ...
 明らか

$$\frac{\partial^2 H(\omega, \bar{\omega})}{\partial \omega \partial \bar{\omega}} \Big|_{\omega=z, \bar{\omega}=\bar{z}} = a_{1\bar{1}} = a_{\bar{1}1}(z, \bar{z})$$

$$\frac{\partial^2 H(\omega, \bar{\omega})}{\partial \omega \partial \bar{\omega}} \Big|_{\omega=z} = a_{1\bar{1}} + a_{\bar{1}1}.$$

よって, 上の等式 [2]

$$K(\omega, \bar{\omega}) = -\frac{2}{\pi} \frac{\partial^2}{\partial \omega \partial \bar{\omega}} g(\omega, \bar{\omega})$$

と, $K(z, \bar{z}) = -2a_{1\bar{1}}(z, \bar{z})/\pi \geq 0$ に注意すれば, 求める変換式が得られる。

3. $K(ds_B) \leq -4$. $\Omega \in O_{AB}$ とする. 解析容量 $C_B(z)$ は

$$C_B(z) = \sup_{|f(z)| \leq 1} |f'(z)|$$

と定義される. $f'_0(z, z) = C_B(z)$ である $f_0(z, z)$ は

に存在し, Ahlfors 函数とよばれる.

定理 2 [7]: $C_B(z) > 0$ かつ $C_B(z)$ が 2 回連続微分可能なときは $K(ds_B) \leq -4$. とくに Ω が平面領域かつ $\Phi \cap \Omega \neq \emptyset$ ならば, $C_B(z)$ は実解析的であり, つねに $C_B(z) > 0$.

証明. 支持計量の方法を用いる. Ahlfors 函数 $f_0(z, \bar{z})$ をとり

$$F(z, t) = \frac{f_0(z, \bar{z}) - f_0(t, \bar{z})}{1 - \overline{f_0(t, \bar{z})} f_0(z, \bar{z})}$$

とおく. $|F(z, t)| \leq 1$ である.

$$|F'(t, t)| = \frac{|f_0'(t, \bar{z})|}{1 - |f_0(t, \bar{z})|^2} = C(t)$$

点 z の近傍で, $C_B(t) \geq C(t)$ であり, $C_B(z) = C(z)$

1 となる. $\log(C_B(t)/C(t))$ は $t = z$ で極大値をとる.

これから $t = z$ において

$$-\Delta \log C_B(z) \leq -\Delta \log C(z)$$

計算により $\Delta \log C(z)/C(z)^2 = 4$ となる, $K(ds_B) \leq -4$

平面領域における $C_B(z)$ の実解析性は, $C_B(z)$ と

セグー関数 $k(z, \bar{z})$ との関係 $C_B(z) = 2\pi k(z, \bar{z})$ [2]

から容易に示される. 実際 Ω が n 個の解析曲線にのみまた

平面領域ならば, Ω 上で正則な直交基底系 $\{g_\nu, \bar{g}_\nu\}_{\nu=1}^n$ をとると

ができて,

$$k(z, \zeta) = \sum_{v=1}^{\infty} \varphi_v(z) \overline{\varphi_v(\zeta)}$$

と展開される. 故東は Ω の境界上のノルム

$$\|\varphi\|^2 = \int_{\Omega} |\varphi|^2 |dz|$$

に因りて強拘束であり, さらに Ω 上で広義一様である. ことか
る $k(z, \bar{z})$ の実解析性は明らかである. 一般領域の場合は,
 Ω の近似 $\{\Omega_v\}$ を考え, 対応する核乗数 $k_v(z, \bar{z})$ が
 $\Omega \times \Omega$ 上で広義一様拘束することから, 実解析性が証明さ
れる.

注意. $C_B(z)$ の実解析性は, 開リーマン面の場合は一般
には成立しない. ことか山田 [10] により反例が得られたい
る.

等号条件は異なる方法によって完全には反いが, かなり
とらまて求められた [3, 8]. ことか示そう.

定理 3. Ω は平面領域とする. Ω における Ahlfors 乗数
 $f_0(z, \bar{z})$ が, Ω 以外に零点を持つば, Ω の点で $K(d\sigma_B)$
 < -4 .

証明. まず Ω が有限個の解析曲線が Ω をまわっているとき,
その Ω の極値問題を考える.

I. $f(z) = 1$ のとき $\|f\|^2 = \int_{\partial D} |f|^2 dz$ を最小にする.

II. $f(z) = 0$, $f'(z) = 1$ のとき $\|f\|^2$ を最小にする.

問題 I の極値変数は $k(z, \bar{z})/k(z, z)$ であり、最小値 $\lambda_0(z) = -k(z, \bar{z})^{-1}$

問題 II の極値変数 $F_1(z)$ は

$$F_1(z) = - \begin{vmatrix} 0 & k(z, \bar{z}) & k_{\bar{z}}(z, z) \\ 0 & k_{00} & k_{01} \\ 1 & k_{10} & k_{11} \end{vmatrix} / \begin{vmatrix} k_{00} & k_{01} \\ k_{10} & k_{11} \end{vmatrix}$$

で与えられる、その最小値は、 $\lambda_1(z) = k_{00} / (k_{00}k_{11} - |k_{01}|^2)$ となる。ここで $k_{\alpha\beta} = (\partial^{\alpha+\beta} / \partial z^\alpha \partial \bar{z}^\beta) k(z, \bar{z})$ 、さらに曲率と最小極値との関係は

$$(3) \quad K(ds_B) = - \frac{\lambda_0(z)^3}{\pi^2 \lambda_1(z)}$$

で与えられる。これ等の結果を Bergman¹⁾ Bergman 核に関し
て導いた公式の類似物がある [2]。 $K(ds_B) \leq -4$ は (3)
から示される。 $\varphi(z) = f_0(z, z) k(z, \bar{z}) / 2\pi k_{00}^2$ は問題 II
の条件をみたしている。 $\|\varphi\|^2 = (4\pi^2 k_{00}^3)^{-1} \geq \lambda_1(z)$ ため
ら、 $K(ds_B) \leq -(\pi^2 \|\varphi\|^2 k_{00}^3)^{-1} = -4$.

等号条件をしるべきため、 $f_0(z, z)$ は 0 以外 9 零値をもつ

のものである。 $k(z, \bar{z})$ の共役核を $l(z, \bar{z})$ とかく。 $l(z, \bar{z})$ は $z = \bar{z}$ に留数 1 の極を持ち、 z, \bar{z} に関して対称、かつ境界に沿って

$$(4) \quad l(z, \bar{z}) |dz| = i \overline{k(z, \bar{z})} dz$$

が成立する。 さうに $l(z, \bar{z})$ は Ω 内に零点をたないことが知られている [2]

さて、

$$h(z) = (z - \bar{z}_0) f_0(z, \bar{z})$$

とおく。 $h(z)$ と $\varphi(z)$ の内積を計算する。 (4) を使って、

$$\begin{aligned} (h, \varphi) &= \int_{\partial\Omega} h \frac{\overline{\varphi(z, \bar{z})} k(z, \bar{z})}{2\pi k_{00}^2} |dz| \\ &= \frac{1}{2\pi k_{00}^2} \int_{\partial\Omega} (z - \bar{z}_0) l(z, \bar{z}_0) l(z, \bar{z}) dz = \frac{(\bar{z}_0 - z_0)}{2\pi k_{00}^2} l(z_0, \bar{z}_0). \end{aligned}$$

$\varphi_\varepsilon(z) = \varphi(z) + \varepsilon h(z)$ は問題 II の条件をみたしている。

$\|\varphi_\varepsilon\|^2$ の最小値は、 $\varepsilon = -|(h, \varphi)| \|h\|^{-2} \exp(-i \arg(h, \varphi))$ のときとるが、 φ の値は

$$\|\varphi\|^2 - \frac{|(h, \varphi)|^2}{\|h\|^2}$$

に等しい。 $\varepsilon = \eta$ とおけば $k(ds_B) < -4$ を示す。

Ω が平面一般領域の場合, $\infty \in \Omega$ とし ∞ -收性を失わない. Ω の近似 $\{\Omega_\nu\}_{\nu=1}^\infty$ とし, 各 Ω_ν における Ahlfors 函数を $f_\nu(z, \zeta)$ とかく. $f_\nu \rightarrow f_0$ (広義一様) だから $f_0(z, \zeta)$ の零点 z_0 は, $f_\nu(z, \zeta)$ の零点 z_ν の集積値である. 補助の等角写像を利用すればよいため, $\zeta \neq \infty$ と仮定する. Ω_ν における φ, h に対応する函数を φ_ν, h_ν とかく. Ω_ν における φ の ν -おまじ共役核を $k^{(\nu)}(z, \bar{\zeta}), l^{(\nu)}(z, \bar{\zeta})$ とし, $\nu \rightarrow \infty$ のとき

$$|(h_\nu, \varphi_\nu)| = \left| \frac{(\zeta - z_\nu)}{k_{00}^{(\nu)2}} l^{(\nu)}(z_\nu, \bar{\zeta}) \right| \rightarrow \left| \frac{\zeta - z_0}{k_{00}^2} l(z_0, \bar{\zeta}) \right|$$

だから $|(h_\nu, \varphi_\nu)|$ は正の下限を有する. さらに, (4) より

$$\begin{aligned} \|h_\nu\|^2 &= \int_{\partial\Omega_\nu} |z - \zeta|^2 |l^{(\nu)}(z, \bar{\zeta})|^2 |dz| \\ &= \int_{\partial\Omega_\nu} |z - \zeta|^2 |k^{(\nu)}(z, \bar{\zeta})|^2 |dz| \end{aligned}$$

$z \in \Omega_\nu$ のとき, $|z - \zeta| \leq M$ となるから, 再生性より

$$\|h_\nu\|^2 \leq M^2 k^{(\nu)}(\zeta, \bar{\zeta}) \rightarrow M^2 k(\zeta_0, \bar{\zeta}_0) \quad (\nu \rightarrow \infty)$$

$\|h_\nu\|^2$ が一様有界だから $|(h_\nu, \varphi_\nu)| / \|h_\nu\|^2$ も正の下限を持つ.

このことから $\int_{\partial\Omega} k(ds_B) < -4$.

4. その他の等角計量. $\Omega \neq \text{OAD}$ とする. $\partial\Omega = \{z \mid$

$\iint_{\Omega} |f'|^2 dx dy \leq \pi C_0$ かつ $\sup |f'(z)|$, $f \in \mathcal{O}$
 を $C_0(z)$ とおく. $g'(z) = C_0(z)$ をみたす g が \mathcal{O} 上に存
 在する. $C_0(z) > 0$ ならば $g(z)$ は附加定数を除いて唯一
 定まる. $C_0(z) = 0$ をみたす函数を AD 極値函数と
 して $f_1(z, \bar{z})$ とかく. 測度 $d\mu$ によれば $|f_1(z, \bar{z})| \leq 1$
 [4]: $d\mu_0 = C_0(z) |dz|$ かつ, この結果をつかえば,
 定理 4. $\Omega \in \mathcal{O}_{AD}$, $C_0(z) > 0$ ならば, $K(d\mu_0)$
 ≤ -2 .

証明, Ω 上の exact な微分のつくる Hilbert 空間の Bergman
 核を $K(z, \bar{z})$ とかく. f_1 は

$$f_1(z, \bar{z}) = \frac{\int_{\Omega} \sqrt{\pi} \overline{K(z, \bar{z})} dz}{\sqrt{K(z, \bar{z})}}$$

で与えられる [1]. $C_0(z) = \sqrt{\pi} \overline{K(z, \bar{z})}$. $\overline{K(z, \bar{z})}$ は
 直交函数による展開を持つから, $K(z, \bar{z})$ は実解析的である
 この場合は 定理 3 の証明でも似た Bergman の方法 [2]
 を使うことができる.

問題 I' $f'(z) = 1$ かつ $\iint_{\Omega} |f'|^2 dx dy = \|f'\|^2$
 を最小にする. 最小値を $\lambda_0^*(\Omega)$ とおく.

問題 II' $f'(z) = 0$, $f''(z) = 1$ かつ $\|f''\|^2$ を最小にする.
 最小値を $\lambda_1^*(\Omega)$ とおく.

$$(5) \quad K(ds_D) = -\frac{2}{\pi} \frac{\lambda_0^*(z)^2}{\lambda_1^*(z)}$$

問題Iの極値函数は

$$F_0(z) = \int_{\bar{z}}^z \frac{\bar{K}(z, \bar{z})}{R(z, \bar{z})} dz$$

と与えられ、 $\lambda_0^*(z) = R(z, \bar{z})^{-1}$ 。問題II'の条件をみたす函数として、

$$\varphi(z) = \frac{1}{2} F_0(z)^2$$

をとる。 $F_0 = f_1(z, \bar{z}) / \sqrt{\pi R(z, \bar{z})}$, $|f_1| \leq 1$ である、

$$|\varphi'| \leq \left| \frac{f_1'(z, \bar{z})}{\pi R(z, \bar{z})} \right|$$

を得た。

$$\lambda_1^*(z) \leq \|\varphi'\|^2 \leq (\pi R(z, \bar{z})^2)^{-1}$$

(5) より $K(ds_D) \leq -2$ である。

Ω を平面領域とし、 $d\Omega_{SD} = C_{SD}(z) |dz|$ とする。

Ω 内で単葉正則かつ $|f(z)| \leq 1$ をみたす函数族を \mathcal{SB} とおき、

$C_{\mathcal{SB}}(z) = \sup |f'(z)|$, $f \in \mathcal{SB}$ とおく。 $C_{SD}(z)$

$= C_{\mathcal{SB}}(z)$ となることが知られている [1]。したがって、

$C_{SD}(z)$ が2回微分可能ならば定理2の証明がそのまま使

うことができて、 $K(ds_{SD}) \leq -4$ となる。(しかし、複連

結領域の場合 $C_{SD}(z)$ は必ずしも微分可能な限り。例
として円環 $\Delta: R^{-1} < |z| < R$ ($R > 1$) をとる。 $R^{-1} < x < R$
とする。 $C_{SD}(x)$ を与える極値函数 $P(z)$ は $P(x) = 0$ を
たし、 Δ を半径1の円環を線用根 \wedge 写像する。 $P(z)$ は Δ の
Green 函数 $g(z, x)$ を用いてつぎのように表わされる。

$$\log |P(z)| = -g(z, x) - \begin{cases} \frac{\log R x \log R |z|}{2 \log R} & (R^{-1} < x \leq 1) \\ \frac{\log(x/R) \log |z|/R}{2 \log R} & (1 \leq x < R) \end{cases}$$

である。

$$(b) \quad \log C_{SD}(x) = \log C_{\beta}(x) - \begin{cases} \frac{(\log R x)^2}{2 \log R} & (R^{-1} < x \leq 1) \\ \frac{(\log x/R)^2}{2 \log R} & (1 \leq x < R) \end{cases}$$

Δ は回転に対して不変であるから、 $C_{SD}(z) = C_{SD}(|z|)$ 。
(b) より $\log C_{SD}(z)$ は $|z| = 1$ において微分可能な限り。
最後に Ω の Bergman 核 $K(z, \bar{z})$ に対し計量
 $ds_K = \sqrt{\pi K(z, \bar{z})} |dz|$ を考える。 ds_K の曲率 $K(ds_K)$
は円環の場合でも4より小さく、負も大きき負も存在する (単
連結領域の場合 $K(ds_K) = -4$)。上記の円環 Δ について
示す。 Δ の普遍被覆面を右半平面 \mathbb{H} とする。 $z = a$ とす

$$w = \exp\left(\frac{\log z}{2 \log R} \pi i\right), \quad \operatorname{Re} w > 0.$$

Δ のグリ-ン関数は Π によって

$$g(w, \bar{w}) = \sum_{v=-\infty}^{\infty} \log \left| \frac{w + \bar{w}_v}{w - \bar{w}_v} \right|,$$

と表わされる [9]. $\bar{w}_0 = w$, $\bar{w}_v = e^{-\frac{\pi^2}{\log R} v} \bar{w}_{v-1}$.
 したがって

$$C_p(w) = \frac{1}{2 \operatorname{Re} w} \prod'_{v=-\infty}^{\infty} \left| \frac{w - \bar{w}_v}{w + \bar{w}_v} \right|.$$

\prod' は添数 0 を除いた積を表わす. 等式 (1) を用いて計算すると,

$$\pi K(w, \bar{w}) = \frac{1}{4(\operatorname{Re} w)^2} + \sum'_{v=-\infty}^{\infty} \frac{\bar{w}_v}{(w + \bar{w}_v)^2}.$$

\sum' は 0 を除いた和を表わす. $-R < z < R$ のとき,

$$w = e^{i\theta}, \quad -\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}, \quad a = e^{-\frac{\pi^2}{\log R}} \text{ とおくと}$$

$$\pi K(w, \bar{w}) = \frac{1}{4 \cos^2 \theta} + \sum'_{v=-\infty}^{\infty} \frac{a^v (1 + a^{2v}) \cos 2\theta + 2a^v}{(1 + 2a^v \cos 2\theta + a^{2v})}$$

したがって Δ のポテンシャル計量を $p(w) |dw|$ とかけば

$$p(w) = \frac{1}{2 \cos \theta}$$

p^2 と πK を比較する. $2a^v / (1 + a^{2v})$ は v が ± 1 のとき最大

だから, $\cos 2\theta \leq -2a/(1+a^2)$ となる w_1 については $\pi K(w, \bar{w})$ の ± 2 項は負となる. また $|\theta| \leq \frac{\pi}{4}$ のときは ± 2 項は正. また ± 2 の \pm の場合に応じて $\pi K \leq p^2$, $\pi K \geq p^2$.

$$H(w) = \log \frac{\pi K(w, \bar{w})}{p^2(w)} \rightarrow 0 \quad (w \rightarrow i\gamma)$$

だから, $H(w)$ は最大値および最小値を Π の辺上 w_0 および w_1 でとる. この等号成立は $\Delta H \leq 0$, および $\Delta H \geq 0$ だから, 最大値をとる場合は

$$-\Delta \log \sqrt{K(w_0, \bar{w}_0)} \geq -\Delta \log p(w_0)$$

$$\pi K(w_0, \bar{w}_0) > p(w_0)^2$$

$$-\Delta \log \sqrt{K(w_0, \bar{w}_0)} > -\frac{\Delta \log p(w_0)}{p(w_0)^2} = -4.$$

同様に ± 2 の \mp の場合 $K(ds_K) < -4$.

さらに, O_G の場合があるが, 種数 1 の円 Γ の ± 2 面にについては, $K(ds_K) \equiv 0$ となることが容易にわかる. (だから Γ Bergman 計量 ds_K の曲率 κ は ± 2 の Γ 面に沿う上界は 0 である.)

REFERENCES

- [1] Ahlfors, L. V., and Beurling, A. Conformal invariants and function-theoretic null-sets. *Acta Math.* 83 (1950), 109-129.
- [2] Bergman, S. The kernel function and conformal mapping. *Math. Surveys* 5, Amer. Math. Soc. Prov. R. I. (1950).
- [3] Burbea, J. The Carathéodory metric in plane domains. *Kōdai Math. Sem. Rep.* 29 (1977), 157-166.
- [4] Sakai, M. Analytic functions with finite Dirichlet integrals. To appear.
- [5] Sario, L., and Oikawa, K. Capacity functions. Springer-Verlag 1969.
- [6] Suita, N. Capacities and kernels on Riemann surfaces. *Arch. Rat. Mech. Anal.* 46 (1972), 212-217.
- [7] _____. On a metric induced by analytic capacity. *Kōdai Math. Sem. Rep.* 25 (1973), 215-218.
- [8] _____. On a metric induced by analytic capacity II. *Ibid.* 27 (1976), 159-162.
- [9] Tsuji, M. Potential theory in modern function theory. Maruzen 1959.
- [10] Yamada, A. On the linear transformations of Ahlfors functions. To appear.
- [11] Zarankiewicz, K. Über ein numerisches Verfahren zur konformen Abbildung zweifach zusammenhängender Gebiete. *Z. Angew. Math. Mech.* 14 (1934) 97-104.